

聖書箇所：第一サムエル記 26章 1～12節

説教題：だれが無罪でいられよう

1 危機に直面するダビデ

今日からまたしばらく第一サムエル記を続けて見て参ります。ダビデは、イスラエルの王であったサウルからいのちを追われています。ダビデがサウルに対して何か悪いことを企てて、それでサウルの怒りを買ったということではありません。ダビデは忠実にサウルに従ってきただけです。しかしダビデが忠実に働けば働くほど、皮肉なことです。人々のダビデに対する人々の人気がうなぎ登りになっていく。ついには女たちがはやり歌を歌うまでになりました。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」

こんな歌を聞かされて、サウルが心穏やかでいられるはずはありません。いつかダビデは自分を裏切り、必ずイスラエルの王座を狙ってくるに違いない。そのような恐れとダビデへのねたみからやがてサウルはダビデを殺そうと決心します。

ある日、サウルはスパイをダビデの家に送り込み、ダビデを暗殺しようとします。すんでの所で助かりはしましたがその日以来、ダビデはすべてのものを失います。イスラエルの陸軍大臣という地位と名誉を剥奪され、お金もなければ食べるものもない。物乞いをするような格好でやっと生き延びます。

やがて、そんなダビデを慕って若者たちが集まるようになります。気がつけば、その数はおよそ六百人。少しばかり力を持つようになりましたが、町に住むことは許されません。ダビデに見つからないようにと、いつも荒野

をさまよい歩いていました。

それでも、ダビデの居場所を知る者がいてサウルに密告する者が現れました。「ダビデはエシモンの東にあるハキラの丘に隠れているではありませんか。」

早速サウルは三千人の精鋭部隊を率い、ダビデを殺すために出陣します。ダビデは大きな危機に直面します。

2 ダビデ

(1) どうして危険なことをあえてするのか
ダビデがこの危機をどうやって乗り越えようとしたのかを見ていきます。まず5節。「ダビデは、サウルが陣を敷いている場所へ出て行き、サウルと、その將軍ネルの子アブネルとが寝ている場所を見つけた。」

私は軍隊のことについて詳しくはありませんが、司令官が戦いの最前線に立つことはあり得ないことは知っています。司令官は最も安全なところに司令部を置き、そこでいろいろな指示を出します。もし最前線に立つことがあるとすれば、それは兵士たちを激励するためとか、戦いの状態がどうなっているのかを確認するのが目的です。

では、ダビデはどうだったのか。ダビデ自ら最前線に赴いています。そして自分の甥であるアビシャイとともに敵の陣地に潜り込んでいきます。映画であれば、ヒーローが危険を顧みず活躍するのですから見ている観客は感動するかもしれない。しかしこれは映画ではなく現実の戦いです。司令官であるダ

ビデがもしここで敵に見つかり、殺されたら一卷の終わりです。ダビデが死ぬだけではなく、ダビデと一緒にいた者も全員殺されてしまいます。その中にはダビデの家族もいました。その家族も危険にさらすことになる。それなのに、なぜダビデはこんなことをあえてするのでしょうか。

(2) 追いつめられるダビデ

ダビデは今自分が何をしようとしているのかわからなかったはずはありません。むしろ冷静に状況を観察し、きちんと考え判断してこのような行動をしています。それなのに、常識では考えられないようなことをあえてダビデがしなければならなかった。裏を返せば、それだけダビデは追いつめられていたということです。ダビデが司令部にこもり、そこで戦いの指揮を執って、真正面からサウルを迎え撃つ。もしやれるのならダビデだってそうしたかったでしょう。しかしダビデはそんな計画を早々とあきらめます。というのは、選りすぐりの三千人で構成される軍隊と戦おうとしても、こちらはただか六百人しかない。最初から勝ち目はないとわかったのです。じゃあどうするか。逃げるか。でも逃げ道はふさがれてしまいました。このままではただ殺されるのを待つしかない。

そんな状況に追いつめられたとき、ダビデはひとつの決心をします。自分自身が戦いの最前線に向かう。それも自分ともうひとりの部下を連れ、たったふたりで。それで成功する保証は何もありません。いや、どう考えてもあまりにも無謀すぎます。夜の闇に隠れて忍者のように行動してはいますが、ちょっとでも敵に感づかれるようなことがあれば、それこそ一刀両断。すべては終わりです。

敵の陣地にもぐり込む前に、ダビデはふたりの部下にこう問いかけました。「ダビデは、ヘテ人アヒメレクと、ヨアブの兄弟で、ツェルヤの子アビシャイとに言った。『だれか私と一緒に陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか。』」

この呼びかけに答えたのはアビシャイのほうです。もう一方のヘテ人アヒメレクは答えていない。つまりアヒメレクは目の前の三千人の軍隊を見て尻込みしたのです。アヒメレクを責めるわけにはいきません。それくらい危険な任務なのです。でもほかに選択肢はありません。怖いから黙って何もしなかったらどうなるでしょう。日が上ると同時にサウルの軍隊が襲いかかってきて、全員殺されるだけです。であれば、わずかでも残された可能性にかけるしかありません。ダビデと数人の部下だけならもしかして逃げ延びることはできたかもしれませぬ。しかしダビデはそうしません。自分のいのちを捨てて、ほかの人たちが生き延びられる道を探ろうとします。

3 だれが無罪でいられよう

(1) 二つの意味

ダビデとアビシャイは、密かにサウルの陣地に潜入し、サウルがぐっすり眠りこけているのを見つけてます。都合の良いことに、サウルの頭のところには槍が置いてある。あの槍でサウルを一突きすれば、簡単に殺す事ができる。またとない絶好のチャンスが目の前に転がっていました。野球にたとえれば、99%絶対に勝ち目がないと思えたゲームが、9回の裏ツーアウトの場面で、劇的逆転さよならホームランを打つようなものです。

しかしそのときダビデはこう言って、はや

る部下をいさめます。「主に油注がれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう。」

主に油注がれた方とは誰でしょう。サウルは確かに祭司サムエルの手で油を注がれていたのです。だから、この場面でダビデはサウルひとりを指してこう言っている、と私は最初思っていました。

でもよく考えたらもうひとりいたのです。誰ですか。ダビデです。ダビデも実はサムエルの手で油を注がれ、イスラエルの次の王となると預言されていた。そうすると、この9節のことばは、最初考えていたのよりも複雑な意味を持つことになります。二つの意味があるのです。

一つ目は、今この場面からもわかるように、ダビデは油注がれ方であるサウルを自分の手で殺す事ができない。もしそんなことをしたら罪を犯すことになる。そういう意味。これはすぐわかる。

しかしもう一つの意味もある。ダビデを殺そうとしているサウルにもこのことばが跳ね返っていくのです。つまり、サウルも今まさに油注がれたダビデを殺そうとしているのです。サウルも無罪ではいられなくなる。そんな意味にもなるのです。

では、ダビデはこう言いたかったのでしょうか。「サウルは自分を殺そうとして追いかけ回し、大変な罪を犯そうとしている。だからサウルは間違っており、自分のほうが正しい。」自分を正当化するためにこう言ったのか。そうではありません。ではどういうことか。

(2) サウルが罪を犯すことのないように

ダビデは、サウルの枕もとにあった槍と水差しとを持ち去り、安全なところに戻りまし

た。三千人もの選りすぐりの兵士がいたのに、誰も気がつかないなんておかしいと思うでしょう。普通こんなときは、必ず24時間交替で見張りが立つのが軍隊の基本中の基本の行動です。12節に「主が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠りこけていたからである」とあります。主がダビデを守っておられたのです。つまり神はここで奇蹟を起こし、ダビデがしようとしていることを主ご自身も全面的に応援し、守り支えていたのです。なぜそこまでしてダビデを守られたのでしょうか。もちろんダビデのいのちを守るためでした。そして六百人に及ぶダビデの部下たち、家族たちを守るためでした。

でもそれがすべてだったのでしょうか。この後どうなったのでしょうか。13節以降のことについてはまた次週に取りあげる予定です。ひとことだけ言えば、ダビデが持ち帰った槍と水差しをきっかけにして、サウルは戦いを思いとどまり、ダビデの前から引き返していきます。確かにダビデは助かり、ダビデが罪を犯さずに済んだ。すばらしい結末となりました。

しかしそれだけではないのです。サウルのことばも考えなければなりません。サウルはダビデを殺す事を思いとどまったのです。ダビデのことばで言えば、サウルは罪を犯さずに済んだことになるのです。

そうしますとダビデは何をしようとしていたことになるか。サウルが罪を犯すことのないようにと、サウルに対する警告の意味で、ダビデは槍と水差しを持ち去ったことになる。ダビデは、皆殺しになるかもしれないというぎりぎりの恐怖の中で、サウルに対しそのような配慮をしていたことになります。

驚くでしょうか。驚いてはなりません。イ

イエス・キリストも同じようなことをされるのです。イエス・キリストはどのような方でしたか。聖霊を受けられた方です。旧約聖書では、主に油を注がれた方という表現をします。そのイエス・キリストはどのような扱いを受けられたのでしょうか。人々は、この方を十字架に追いやり、十字架で殺しました。ダビデの言葉を借りると、主に油注がれた方に手を下したのですから、手を下した者は無罪ではられません。では誰が手を下したのですか。自分ではない。別の人たちだと言うのでしょうか。いいえ。確かに私は神の子イエス・キリストを十字架につけたです。十字架で苦しめました。十字架で苦しめるイエスを見て、あざ笑っていました。そうやってこの方を殺し、自分こそ正しい者だと言い、十字架で殺されたイエス、あれは愚かで間抜けな男だったのだと勝ち誇っていたのです。

そんな私たちに対し、イエスはどのようにされるましたか。怒りましたか。そんな裏切り者は槍で一気に地に刺し殺すべきだと考えましたか。いいえそうではない。

ダビデは何をしましたか。自分が殺されかけているのにもかかわらず、サウルが罪を犯すことのないようにと考えていた。イエス・キリストもそうされたのです。この方は十字架で苦しみながら、人々が「愚かな男だ。自分を救ってみろ」とののしる声を聞きながら、なおそのなかで、私たちが罪を犯すことのないようにと、私たちに責めることなく、黙々と私たちのために死んで行かれました。

ダビデをとおして、私たちの救い主がどこまであわれみを注いでくださっていたのかを思い起こし、主の御名をあがめたいと願います。